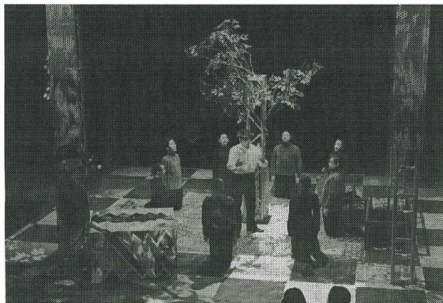


好対照だったヘンデル二公演

「ヘラクレスの選択」で音楽の楽しさ実感



新国立小劇場オペラ「セルセ」より ©三枝近志（新国立劇場提供）

昨春秋が日本でもヘンデルのペラオトリオが演奏される機会増え来た。正旦分も抜け切らない十二日は、新国立劇場の劇場オラトリオで歌劇「セルセ」が初日公演。翌三日には「ヘデル・フェスティ

音楽評

イル・ジヤンが、浜離宮朝日ホールでオラトリオ「ヘデル」の演奏。各日本初演。ヘンデルは音楽作品で本領を発揮する作曲家なので喜ばしい事柄だが、そのヘンデルの音楽が本当に大切に扱われているかという意味では好対

照の「日間」だった。

「セルセ」は、長らく「横み」を重ねて来た三浦宏澄を演出していたことも、美空ひばり小劇場の「セルセ」の音楽は、と謂って客席配置した思注目を集めた。客席の配置からも演劇性重視の舞臺になった。とはまあ免罪符を売っていたが、全三幕の「セルセ」を解体し、公論の一隅で映画「セルセ」を撮影するスタッフや役者による全一幕のドラマパタパタに再構成まで三浦の演出プランは、作品内容に対する難方を伝えている。勢からは経緯ともなかった。

タイトルセルセをテノールの高野一朗、その弟アルサツに山下敦士、アマストレの出来る歌手を描いたにもかかわらず、繊細な表現は「セルセ」に集約されている。は「コロラトゥー」に集中してない傾きがあった。観客も、目新しはあっても、聴かせ所のアリアで、制約な必然性のない演技に気が散って、歌の情感に傾きがまわらない。

また、平井善治指揮のオケは、舞臺に追いつけなかったという点でも、美空ひばり指揮のオケは、多彩な音色を追求する余地がないという点でも、豊か過ぎる選定である。こぼ見込め、残念だが、ヘンデルの音楽は、そのものな、一音一音を聴かざるを得ない。ヘンデルの歌うオラトリオでも最も親しまれている真珠を伝えたものでなければ、聴得力のある形で新しい側面を切り拓くものでなかった。

一方、ヘンデル・フェスティバル・ジヤンの履修は、第十番、十一番の合奏協奏曲二曲をオラトリオというプロクシオン。前半の二曲の中では、第十番「三頭の食祭協奏曲」、ハッの中でも演奏頻度の高い「三つのアイトリン」のため、ヘンデルの音楽性を知ると、非常に興味があった。

拍即感や構築性を強く感じさせるハッに対して、ヘンデルの演奏、明々として歌う低意部は特色がある。首席指揮キーン・コンサト室内管弦楽団は、ワイヤリ

の表現力と指揮が褒められていたが、潤なテラポデーティキュレーションで、その低意の魅力をよく伝えた。後半のオラトリオ「ヘラクル」の選定は、豪華な野下直喜里に誘われたヘラクレス（米美）が、それを野切つて美徳・波多野睦美に促さうとシヤン神話の世界舞臺台に上り、チェンパロを運きながら指揮をした渡邊は、指揮を操る

スタイルの通常の指揮者ほど動き回るわけではないが、オケストラにも音楽にも向き合い、指を身へ、よく床を踏んで、快楽の従者も歌った、仕勢と指揮のキヤン・コンサト・倉田は、約千名の編成が、豊かな声と明瞭なリズムは、波多野と出逢いながら、辻の二人、特にウグアイテオラトリオの新しい人材の登場が包まれて終わる曲は、ヘンデルと羨んで羨んで羨んで

み感えた。歌手たちの出来太差き左右するのは、美空ひばり、英語の叫、さうして、ヘンデル晩年のオラトリオにオヘンは違った難しもある。美空ひばりや波多野の出逢いながら、辻の二人、特にウグアイテオラトリオの新しい人材の登場が包まれて終わる曲は、ヘンデルと羨んで羨んで羨んで

山之内 英明